中谷孝雄全集

第四巻

中谷孝雄全集

第四巻

限定2000部の内　第一〇四番

中谷孝雄全集　第四巻
昭和五十年十月二十五日
著者　中谷孝雄
編集　第一出版センター
発行者　野間省一
発行所　株式会社講談社
東京都文京区音羽二―一二―二一・郵便番号一一二
電話東京（〇三）九四五―一一一一（大代表）振替東京二九三〇
印刷所　図書印刷株式会社
製本所　大製株式会社
定価　三五〇〇円　帯丁本・乱丁本はお取替します。
©中谷孝雄　昭和五十年　Printed in Japan　(七)

中谷孝雄全集　第四巻

目　次

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

招魂の賦　七頁
抱影　七一頁
蟬の声　一〇七頁
青空　一六一頁
評伝　梶井基次郎　二三三頁
解説　駒田信二　四四六頁
年譜　四五一頁

口絵写真撮影・講談社写真部　浜田益水

昭和50年7月　松阪城趾にて

装幀　岩本正雄

中谷孝雄全集　第四巻

招魂の賦

私はこの七月、南紀方面――いはゆる熊野地方へ旅行するつもりで、出発は一応五日と予定してゐた。熊野は佐藤春夫先生の故郷であり、私は前から一度行つて見たいと思ひながら、まだその機会を得ないでゐた。先生が生れ育たれたのは新宮市であるが、先生の父祖の地は下里町であり、そこの佐藤家代々の墓地には先生のお墓もできてゐる筈であつた。先生のお墓は京都の知恩院のを本墓として、東京には小石川の伝通院にある。私はこれらのお墓へはもう何度かお参りしてゐるが、今度は下里町のお墓へも是非お詣りしたいものであつた。

ところが出発予定の前日になり、前から築地の癌センターに入院してゐた淀野隆三が危篤に陥つた。私は淀野家から電話でそのことを知らされると、すぐ病院へ向つた。淀野と私とは四十年来の友人であり、大学時代には『青空』といふ同人雑誌を一緒にやつた仲間であつた。『青空』の同人の大部分は京都の高等学校（旧制三高）の出身者であつたが、終始その中心になつて働いたのは梶井基次郎、外村繁（当時は本名の茂）、三好達治、淀野隆三、そして私もその一人といつてよいだらう。この五人のうち、梶井は早く三十そこそこで死に、近年になつて外村と三好とが相次いで亡

くなつたので、残つてゐるのは今は淀野と私とだけであつた。
病院へ着き、四階（病院では四を嫌ふから五階となつてゐたやうにも思ふ）でエレベーターを降りると、正面の受付の隣りに見舞客の控所があり、偶然そこから淀野の長男の隆君が出てきた。隆君は私を認めるとすぐ傍へ近づき、
「たつたいま主治医の回診がありましたが、もう一時間か二時間しかもつまいとのことです」
と伝へ、私を父の病室へ案内した。
病室には淀野の奥さんや娘たちが付添つてゐて、私は彼女たちに迎へられて淀野のベッドに近づいた。淀野は眼をつむつてベッドに仰臥し、酸素吸入をしながら苦しげに喘いでゐた。隆君が、
「中谷さんがお見えになりました」
と伝へると、淀野はかすかに眼を開いて答へた。
「分つてゐるよ」
私は淀野の手を握り、
「どうだ、苦しいか」
と訊ねた。冷たい彼の手であつた。
「苦しいよ」
「しつかりしろ」
「しつかりしてゐるよ。だけど、もうあかん。すぐあつちを向くやうなことになる」
眼をつむつた淀野の顔に、かすかに痙攣が走つた。自分では笑つたつもりらしかつた。
「あつちを向いたら駄目だ。あくまでこつちを向いてゐることだ」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

「無理や。キミはひとり残つて、がんばつてくれ」
「ばかなことをいふな」
しかし淀野はもうそれには答へず、苦しげに喘ぎ続けた。私もそれきり黙つて、しつかり彼の手を握りしめてゐた。思ふに彼の眼裏には今、梶井や外村や三好の姿が髣髴してゐるに違ひなかつた。だからこそ彼は私に、ひとり残つて、と云つたのだらう。
そこへ新しい見舞客があつたので、私はその人に席を譲り、病室を出て控室へ去つた。控室には十人ばかりの見舞客が詰めてゐたが、その大部分は淀野の勤先の大学関係の人であり、私とは顔なじみが薄かつた。私は片隅の椅子に腰を降ろして、タバコを吸つたり、眼をつぶつて腕を組んだりしながら、ぼんやりしてゐることが多かつた。
淀野が初めて東大病院に入院したのは、一昨年の十一月のことであつた。そのとき淀野は、主治医のいふままに肺が悪いと信じてゐたやうであるが、私が彼の奥さんや長男の隆君から聞いたところによると、医師はこの二人にははつきり癌だといひ、それも病状が非常に進んでゐるから、悪くするともう一、二ケ月しかもつまいと云つたといふことであつた。なんでも左肺と心臓との間に癌ができてゐて、その一部が動脈にかかつてゐるので、手術も不可能だといふのださうであつた。私は淀野の長女の夫から頼まれ、彼と共に改めて主治医のところへ確かめに行つたが、つまりは同じやうなことを聞かされただけのことに終つた。
しかしそんなこととは知らぬ淀野は、むしろ元気さうにしてゐた。入院したお蔭で久しぶりに落着いて本が読めさうだと、一方ではそのことを喜んでさへゐるやうだつた。ところがそれから一週間ばかりして、医師の勧めでコバルト療法を受けることになつたので、彼も初めて癌ではないかと

疑ひ出したやうだ。彼はそのことを、見舞ひに行つた私に話して、
「肺病の療法にコバルトはないだらう」
と云つたが、私が医師はどういふかと訊ねると、むろん医師はそれが最新の療法の一つだと云つたといふことであつた。私は躊躇なく云つた。
「医師がさういふからには、それを疑ふべきではないだらう。われわれ素人には分らないが、コバルトは意外にいろいろなことに利くのかも知れないよ」
「さうかなあ。むろん科学はどんどん進歩するけど……」
淀野は半信半疑ながら、やはり医師のいふことを信じてゐたいやうであつた。
けれども日がたつにつれて見舞客が多くなつたり、また京都の友人や知人たちから見舞品が届いたりするので、淀野もこれはただごとではないと疑はないわけにはいかなくなつたやうだ。しかし入院以来、体重も日に日に少しづつふえてをり、また鏡で見る顔色も決して悪くないので、たとへ癌であるにしてもごく初期の軽微なものだらうと思つたやうであつた。だからこそ彼はこんなことも云へたのだらう。
「医師はおれをうまくだましてゐるつもりらしいが、だまし切れるものではないさ。医師は文学者に対してはもつと正直であるべきだよ」
彼のいふことにも一理はあつたやうだ。しかし彼が文学者であらうがなからうが、医師が正直なことを何も云はないのにも当然の理由があつただらう。医師ばかりではなく、家族の人びともさうであつたし、また私も彼に対して正直になり切ることはできなかつた。私は云つた。
「見たところキミは以前よりずつと健康さうになつたぢやないか。暫く医師の治療に信頼して、あ

まり文学者の自己診断などはしないがいいよ」
淀野もそれを素直に受取つたらしく、
「それもさうだね、たしかにからだの加減は前よりいいのだよ」
と快活げに笑つた。
淀野はその後も、一方では癌の疑ひを抱きながらも、むしろその疑ひを忘れようと努め、また実際にもそれを忘れてゐる時が多かつたやうだ。その頃のある日、京都の先妻——別れた妻となじみの女のひととから偶然、同時に見舞品が届いた。それを見て今の細君が、
「いいひとが何人もあつて結構ですね」
とからかふと、淀野は云つたさうである。
「なさけは掛けておくものやなあ」
私はそのことを細君から聞いて、いかにも淀野らしい云ひかただと、思はず失笑してしまつた。
淀野は京都の生れであり、学校も高等学校までは京都で過した。彼はまた戦争を挾んで前後十余年間、京都へ帰つて亡父の家業の鉄商を継ぎ、傍ら商工会議所会員や市会議員などをしてゐた関係で、京都にはいろいろ各方面に縁故の人が多かつた。彼の先妻も京都の生れであり、彼と離婚してからも京都に住んでゐた。
淀野にはこの先妻との間に、六人の女の子とひとりの男の子とがあつたが、今の細君との間には子供がなかつた。そして六人の女の子のうち既に四人までは他家へ嫁してをり、残つたふたりのうちひとりは京都の先妻が引取つて養育してゐた。また唯一の男の子である隆君も既に結婚して別に家をもつてゐたから、いま家にゐるのは末娘だけであつた。淀野が七人も子のある先妻を離婚して

今の細君と一緒になつたのは、かれこれ十年ばかり前のことであつたが、今の細君はまだ年も若く、彼の長女より十位しか上でないだらう。

淀野の病床には、いつもその細君が付添つてをり、また東京在住の彼の長女や次女や末女などが入れ代り立ち代り見舞ひにきてゐたから、彼の周囲は見た眼にはむしろ明るく、賑かでさへあつた。私もよく彼を見舞つたが、ある日のこと、このところかけ違つて暫く逢へなかつた隆君が偶然そこへ来合はせ、機会を見てこつそり私を廊下へ誘ひ出して、云つた。

「どうせひと月かふた月しかいのちがないものなら、この際、思ひ切つて手術を受けさせて見ようかと思ひます。その結果、たとへ一年でもいのちを延ばしてやることができたら、これに越したことはありませんから」

「しかし、見たところ淀野は元気にしてをり、ボクにはそんなにさし迫つた危険ないのちとも思へませんがね。それに主治医が手術を引受けてくれるかどうか、初めの話では、手術はできないといふことだつたでせう」

「ですから主治医とよく相談した上で、場合によつては他の病院へ移したいと思ひます」

「主治医がどういふか、すべては主治医の意見に従つて決定するがよいでせう」

「では、今日はもう遅いから、明日にも主治医とよく相談してみます」

話がかうと決つたので、私たちはさりげなく前後して病室に帰つたが、そんなこととは知らない淀野は、ベッドの上に起き上つて、テレビに興じてゐた。

淀野が東大病院に入院したまま築地の癌センターへ診察を受けに行つたのは、それからまのない日のことであつた。隆君が主治医と相談した結果さういふ運びになつたのであつたが、しかしそこ

での診察の結果も、私が淀野から直接聞いたところによると、ここの主治医が淀野に云つたのとほぼ同じ程度の左肺の疾患といふことであり、決して正直なものではなかつたやうだ。ただ癌センターでは、それを今のうちに手術して除去するがよいといふ点だけが違つてゐた。淀野はそのことに就いて、こんなふうに云つた。

「ここの病院で手術をしたがらないのは、機械が旧式でよくないからださうだ。そこへいくと癌センターの機械は最新式の非常に優秀なものださうだよ」

「それなら安心だね」

私はそんな気安めしか云へなかつた。

「うん、たとへ癌であつたにしたところで、おれのはまあ前癌症状といふ位のところだろうからな」

「バカだな。医師のいふことを信じないのなら、医師にはかからないことだ」

「とにかく手術を受けることにするよ。ああ、これでさばさばした」

私にはまだ少し腑に落ちないところがあつた。ここの主治医の診断によれば、癌の一部が動脈にかかつてをり、だから危険で手術ができないのだといふことであつたが、癌センターではそこのところをどのやうに処置しようといふのであらうか。危険はないといふのだらうか。なんだか心許ない気がしないでもないが、さうかといつて素人の私がそんなことを心配しても仕方のないことであり、ここはやはり医師を信頼する以外はないやうであつた。

やがて淀野は十二月の末に東大病院を退院し、翌年の正月、癌センターの病室が空くのを待つてそこに入院した。

手術は入院後十日ばかりして行はれた。私はその日、早くから病院に詰めてゐたが、彼が手術室へ運ばれていく直前、笑ひながら云つた。

「これまでさんざん悪いことをしてきた罪障のかたまりを、この機会にきれいさつぱりと取り去つてもらつてくることだな」

淀野も元気さうに笑ひながら答へた。

「云つたな、あとで日記につけといてやるから」

淀野は永く小説は書かず、近年は大学の教授をしながら翻訳などをしてゐたが、日記だけは若い頃から忠実につけてゐた。

手術は六時間ばかり掛つた。そして淀野は手術室からすぐ静養室へ運ばれてしまつたから、私は彼に逢ふことはできなかつたが、後で医師から聞いたところによると、手術は一応成功したが動脈にかかつてゐる部分は除去することができなかつたから、今後はコバルト療法を続けるとのことであつた。やはりさうだつたのか、と私は心にうなづいた。

それからひと月余りたち、淀野はかなり元気になつて退院した。そして四月からは勤先の学校へも出られるやうになり、また七月二十八日の外村繁の「澤標忌」にも彼は出席した。外村が癌で死んでから満五年、その日は六回忌に当つてゐた。淀野はその時のテーブルスピーチのなかでこんなことを云つた。

「久しぶりに皆さんにお逢ひできてこんな嬉しいことはありません。来年はボクはもうこの会には出席できないかも知れませんが、どうか来年も再来年も末永く外村のためにこの会を続けていただきたいものであります」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com